

この星の色

naoyama1219

——もしも許されるなら、この時を永久に掌(たなごころ)へしまおうであろうに。

魚たちは鱗を光らせ、空たる海を躍動する。

遙か上の海面から沈降する物質——地上で見る雪のような、生命の欠片が降り注ぐ深海の暗黒は、穏やかな永遠の丘を形作る。

宝石のように透き通った透明な美しさは沈むたびにきらめきを変えていく。光の届く限りは空からの地球を思わせる美しい青、藍色、紺、そして光の届かぬそこは暗黒がすまう。

願わくば——願わくば、この世界が決して汚されぬことのないように。

決して損なわれないことを……。

この海の妙なる神秘を人は知らず
されど 優しくその荘厳な陽動は
その下に隠された魂を物語るような
——ハーメル・メルヴィル

「海の中でも雪が降るんだそうだ。プランクトンなどの生物の死骸が、深海に、雪のように降り注ぐ。その光景を見てみたいな。この肉体でそれは叶わぬ夢だと知っていても、夢を見ることくらいは許されるだろう。……こ狭い檻から逃げ出したいとも、思っているけどな」

笑って、死を近くに控えた男は、冬のすっきりとした空を見上げる。

愛する海を空に重ねているか。

この温暖な土地では地上の雪も見ることにはできないだろう。今時分、白一色に染まっているだろう故郷を脳裏に思い描き、何となく目を閉じた江國(えくに)は、寝ているのか？ とからかわれて顔を上げた。むっとして顔をしかめる。

「立ったまま寝れるほど器用じゃないぞ」

「そうか？ お前ならできるさ」

馬鹿にしているのか本気で言ってるのか、江國は「ばか野郎」とつぶやきながら椅子を引き寄せて座った。

狭い檻、と評されたのは個室の病室だった。造りはホテルのようだが、活動的だったこの男にとっては閉じ込められているようなものだろう。

棚には雑誌や本、様々なものが実家を忍ばせるように並べられていた。色とりどりのそれらから感じ取れるのは、世界に対する限りない興味と探求、飽くなき好奇心だった。微笑ましいほど素直な眼差しが感じ取れる。

壁から視線を剥ぎ取り、本人へ向けた。

「……それより、高坂(たかさか)、どう、だって？」

言葉に突っかかりながら訊ねれば、男はあっさりうなづく。

「余命十ヶ月だ」

「——……」

江國は啞然として二の句が続かない。

しばし絶句してから、思い切り息を吐き出した。涼しい顔で死への時計を見つめている幼馴染みを見つめる。

「お前、自分のことだってのに……ずいぶん、あっさりしてんな」

「自分が苦しいからといって人にそれを押しつけて何になると言うんだ？ 察してくれる人間ならばともかく、お前は、違うだろう」

「俺が……、察しの悪い人間だって、いいたいのか」

どうしてこいつは病床にありながらも俺を扱き下ろすのか。

江國が不機嫌そうに眉をしかめれば、高坂は慌てて「違うさ」と否定した。言葉が足りなかった、と補いながら苦笑する。

「なあ江國、お前は私を目の前にして、すでに死んでいる私を思い描かないだろう？ こうして生きている私をちゃんと見てくれる。だが妻には、すでに死んだ私しか、見えていない。彼女の中で私はもう死んでしまっているんだよ。きっと、希望にすぎること、疲れてしまったんだな……」

初めのうちは生きる道を模索したが、徐々に病状が判明し、可能性が限りなく低いと知って、絶望してしまった。彼女は自分を保つだけで精一杯なんだよ。私が死んだあとも、彼女は生きなければならないから——。

切々と語りながら、いつの間にか、高坂は妻を労る夫になっていた。

自分に差し迫った死より愛する妻を想っている。

その様子は、以前にあった時よりも確実にやつれた様子と相まって、ずいぶんと痛々しかった。

さすがの江國もかける言葉がなく、うつむいて顔をしかめて腕んだ。それに気付いて高坂が急にこやかに笑った。いきなり笑顔に似合わない謝罪を口にする。

「悪い、こんなことをいうつもりはなかった」

「別に謝らなくていい。響子(きょうこ)さんのことは俺も聞いてた。あの……その、なんだなあ、高坂。俺に、何かできることはないか？ 俺は医者じゃないし、だから大して役に立たないかもしれないけど、その……、俺に、出来ることを、さ」

「——」

高坂は目を細めて眩しげに江國を見つめると、少し肉の殺げた頬に柔らかく笑みを刻み、きゅっと唇を引き締める。

かと思えば大仰なため息を漏らし、うつむいた。

「……いい加減にしろ、とたまに自分を叱りたくなる時があるな。私はお前のその言葉を待っていたんだよ。お前の仕事が忙しいことを知りながら電話をしてしまったのも、来て欲しいと暗に匂わせたのも、そのためなんだ。もちろん、お前は知っていたと思っているけどね」

「知って、いたか。さあな、俺は自分の行動を分析するのはどうも苦手だ」

「いいように扱われていると自覚している証拠だな」

江國を見つめながら、高坂はにやにやわと笑ってみせた。江國は苦虫を噛み潰したような顔で、わざとらしい空咳を漏らす。んで、と身動きながら仕切り直した。

「俺に何しろって？」

「お前にしか頼めないことだ」

「もったいぶるなよ」

「私をここから逃がしてくれ」

「……」

意味を理解するのにしばしかかり、すべてを把握した途端、江國は「はあ？」と漏らし椅子から立ち上がっていた。病魔に取り付かれた男を凝視する。

二日後の同じ時間にもう一度来てくれ。その時に実行する。

病人らしからぬ強引さで高坂は約束を取り付けると、まだ目を白黒させている江國をとっと病室から追い出した。必ず来いよ、と背中に向けられた声は陽気さに溢れていて、それは確かに江國が知っている親友だった。

アイツは本当に病人なのか？ と江國はタクシーの中で呟く。

海に憧れ、そのすべてを海——地球に捧げた男。

江國はその生き方が好きだった。

冗談のように吐かれる憎まれ口などは、たまに本気で殴り倒したくなることもあったが、根本的にどこか憎めなかった。

「逃がしてくれて、何するつもりなんだか……」

江國は薄っぺらい冬の空を見上げ、車窓に映る自分に顔をしかめてみせた。

高坂はひとり、中庭に佇んでいた。

江國を見送りに出たのだが、付き添いの看護婦が呼ばれていなくなったため、なんとなくふらふらしている間に中庭まで歩いてきてしまっていた。

天気がいいのに、ベンチにも遊歩道にも、人の姿がなかった。寒さが緩んでいるとは言え、冬の最中であり、風が強いせいだろう。

見上げる空を走る雲が、早い。

これまでの三十四年の人生で、こんなにも切迫した気持ちで空を見上げたことはなかった。死を宣告されてから胃に引きつるようにして溜まった濁り、それがとうとう胸にせり上がってきている。苦しい、辛い、そんな平凡な言葉では言い表せないほど、暗たんたる気分だった。

風が髪を流す。押さえ、空を見上げた。

満足のできる人生だったのか？ そう問われれば、ここまでやって満足しないはずがないと、高坂は答えられる。最愛のもののために全力を尽くしてきた。思い出す記憶がすべて、彼を幸福に浸らせてくれる。

最愛の妻、最愛の息子、そして自分を最大限に高めてくれた海——電話一本ですべてを放り出してきてくれる気のおけない友人もいる。幸せで、満ち足りた人生だったと、言い残してもいい。

しかし、だからこそ高坂は進みたい。今、拘束しているものすべてを振り払って、次の段階へ一歩でもいいから踏み出したかった。

「付き合わせて悪いな、江國。私の最後のわがままだ……」

この言葉を正面切って言えば、江國は間違いなく怒るだろう。諦めてんのか！ と怒鳴り、諦めを撤回させようとするはずだ。その怒りは心地よかった。人のために本気で激怒できる江國という男は、本当に、得難い友達だった。

高坂はゆるやかに目を細めた。

——自分の存在しない世界を思い描くことが、こうも身に迫るとは。

背後から誰かの声が聞こえてきた。空に意識を残したまま、高坂はそちらに身体を向けて、持て余したように足を一步踏み出す。

さく、と軽やかな音が響き、高坂は大きく目を見開いた。

いつの間にか踏みしめていた地面がやわらかな砂に変わっている。

「——」

呆然と顔を上げればそこは砂浜だった。

思い描き、待ち望んだその場所に、高坂は佇んでいる。

真白い砂浜に柔らかな陽差しが反射し、洋々と広がる海は、世界中の画家が一生かけても塗り上げられないほど青が幾重にも重ねられていた。驚きに目を瞬けば、そんな高坂を労るように、冷たい潮風が優しく頬を撫でていく。

「なにぼんやりしてんだ、お前は」

聞き慣れた声が真横でした。

ゆるりと目をやれば、江國が佇み、同じようにして海を眺めている。

茫然とした顔の高坂を見やって、江國はなぜか得意げに鼻を鳴らした。

「立ったまま寝るのは俺じゃなかったのかよ」

「あ、ああ……。綺麗だな、と思って」

「なんだ、久しぶりに見た海に魂でも取られたかと思ったぞ」

「うん、そんなところだ」

あっさりとうなずかれた江國は面食らったらしい。しばし高坂を見つめ、視線を逸らすと、ぶるっと身震いして身体の前後を入れ替えた。陸に向かって歩き出す。

「お前、あまり風に当たるのは身体に良くないんだろ。そろそろ戻った方がいいんじゃないか」

「……身体を冷やしたらいけないだけさ。ああ——そうだったなあ、病院を抜け出してきたんだ。海を見たせいだな、少し、ぼんやりとしていた。今、何時だ？」

移動の疲労に思い至り身体が少しだるくなった。

高坂は覇気のない声で訊ねやる。

ふたりはつい先ほど、島にある唯一のホテルへチェックインしたところだった。荷物を放り出し、夕食までの時間潰しに、高坂が望んだ海辺へ足を向けたのだ。ホテルの支配人には寒いのでなるべく早くお戻り下さい、と声を掛けられた。

江國はどかりと砂浜に腰を下ろした。

「三時半を少し回ったところだ。ホテルのメシ、確か六時からだったな」

「お前はそれしか頭にないのか」

「ふん、こんな何にもない島じゃそれしか楽しみにできないだろ。お前のお薦めでも俺は何もないところは駄目だな。騒がしいのは嫌いだが、こう、人の気配がないところは苦手だなあ。海は綺麗なんだが」

「この浜辺は七年前、今日泊まるホテルと一緒に手がけたんだ。大きな仕事だった」

「……そんなとこだろうと思った」

環境建設デザイナー、という職業を肩書きにしている高坂の言葉に、江國は膝に頬杖を付いて穏やかな海を見つめる。

高坂は環境建築デザイナーの第一人者、先駆者と呼ばれていた。人が永続的に住んでも環境を破壊しない、循環型社会を念頭に置いた建築デザインを扱ってきた。彼が今までに手がけたデザインは多数に上り、特に海を中心としたものが多かった。

汚れのない砂浜をさらりと眺めながら、高坂は腕を組む。

「私は潮の流れや季節、まあつまるところ海洋学や気象学、建築学や生物学を含めた総合的なデザインを目指してきた。だが、簡単な計算間違いで——、この海を汚してしまったんだ」

「お前が？」

高坂は嘆息しながら足もとに視線を落とす。

「私にも関係がある。建設時に、土砂が沖へ流れてしまったんだ。珊瑚礁も、魚も、多大な影響を受けてしまった。まだ独立する前で、会社は事故だと何の補償もしてくれなかったんだよ。だから私が私財をつぎ込んで出来る限り修復したんだが、工事が終わってからこちら、忙しさにまけていたら見に来れなくて」

特にこの島には思い入れがあるんだ。

冷風に浚われそうなほど小さな呟きに、江國はどんなだ、と放り投げるように問う。

高坂は自分が汚した海に背を向け、親友の隣にゆるりと腰を下ろした。

「明日の朝になればわかる。お前もたぶん、ここが好きになるだろう」

「もう充分、好きになっているさ」

「……簡単な男だな」

呆れた友人に江國はにやりと笑った。

「お前と同じように育ってきたんだ、感性は似ているはずだぜ。もっとも、俺は雪国で六歳まで育ったからな、お前が言った……深海の雪が思い描ける。青、じゃないな、藍色を深めたよ

うな空、そこから雪が降ってくる……。さぞ綺麗だろうな。そんなものを毎日見れる魚は幸せものだなあ」

「ホントだよ。魚、いやイルカにでも生まれれば良かったな」

中学のころから耳にたこが出来るほど聞かされている。

江國が笑いながらまたその話かと言えば、高坂は真面目くさった顔で続けた。

「鯨も捨てがたい。あの巨大な体で海の中を自由に動き回るんだ。誰にも邪魔されず、海と私だけで、そうやって一生を終える。妻にそういったら、なら私は海になりますと言り返された。私がどこへ行ってもすぐ見つけられるように、私のすべてを包み込んでしまおうと、そういうことらしい。響子に言わせると私の行動は危なっかしくて仕方がないそうだ」

そう言ってから、高坂は目を上げる。

青い海をじっと見つめた。

「響子はきっと、心配していただろうな」

「置き手紙、何て書いたんだ？」

急に居なくなれば心配するだろうと、高坂は妻に置き手紙を残してきた。

江國に尋ねられた逃亡患者はいたずらっぽく笑い、指先で砂をすくい上げる。

「三日間ほど留守にする。私は自棄になるような大馬鹿者ではない。江國と一緒にいるから心配しなくていい。と、書いた。お前は共犯者だ、江國」

「響子さん、俺の携帯の番号知ってるんだぞ？」

共犯者が思わず声を上げれば、首謀者は笑いながら立ち上がり、先ほどと同じ場所に佇んだ。

——風は穏やかで身を切るほどでもないが、冬の風は容赦なく、病に弱められた身体を包んでいく。江國も身体が消えきったことを感じ、そろそろ限界だなと思いながら立ち上がった。

ゆっくりと高坂に歩み寄れば、その耳を切ないほどの声が、掠める。

「本当に……鯨になりたかったんだ、私は」

江國は足を止めた。

すぐ側に居る親友を見つめる。

江國が知る限り、高坂は気丈で自尊心が高く、弱味を誰かに見せることを極端に嫌っていた。

病は——そこまで、彼を、滅入らせたのか。

江國は躊躇いながら幼馴染みの隣に並び、目の前の海を見つめた。

冬の海だが日本海のような荒々しさはない。

波は心持ち高いが、もともとが穏やかな海らしく、砕ける波頭も波音も身体に優しくかった。

海の色は遠ざかるほどに濃さを増している。

雄大な世界の一端を垣間見せているようであり、手の届かないところに至高の世界があるような、そんな物寂しさを抱かせた。

汚された形跡などどこにも見あたらなかった。

江國は腕を組み直した。

「俺は……、そうだな、オコジョになって雪の中を走り回りたい」

「……オコジョ？」

目をぐるりと回して高坂は江國を見る。

記憶を探っているのか、眼差しが揺れていた。

「オコジョって、あの細長い身体の奴か」

「そうさ。愛嬌があって可愛いだろ」

「お前には似合わん」

本気で呆れたらしく、高坂はそれこそ変態でも見るように江國を眺めやり、いっそのこと熊になれと冷たく突き放した。

食後、高坂は早々と風呂に入りベッドに入ってしまった。

長時間の移動が祟ったらしい。

江國が腹ごなしの散歩から戻ると、すでに室内は電気が落とされ、穏やかな寝息が満ちていた

江國は窓から明かりを頼りに、ベッドへ腰掛けた。

何となく隣のベッドの膨らみを見る。

今、確かにそこにある体温——。

「……お前が死ぬなんて、想像、できねえなあ」

感傷的なつぶやきに重ねて携帯電話の電子音が響き渡る。ぎょっとした江國は、あわてて手荷物の中身を掻き回した。高坂が起きてしまう。焦る気持ちが発見を遅らせてしまい、それからたっぷり一分近く騒音は続いた。

ようやく見つけ出した小さな機械を耳に当てる。

「はい、江國」

『あ……お久しぶりです、響子ですけど』

柔らかい女性の声に江國は息を飲み、うろたえた。充分に出来たはずの電話だったが、心の準備が追いつかず、黙り込んでしまう。

沈黙が流れる。

そんな江國の様子を見透かしたように、彼女は静かに続けた。

『どこにいるのかは聞きませんが、その、身体の方は……大丈夫ですか？』

「た——ぶん、大丈夫。かなり食べてたし」

『こちらの方は心配しないでください、先生には話をしておわかってもらったから。もともと、自宅療養をするかどうか、話し合っていたところだったんです。……ご迷惑じゃありませんでしたか？』

滅入っている様子など無く、むしろ和やかな話し方だった。

江國はほっとため息を漏らす。

「高坂は自分から動き回るのが好きで、誰かが決めるのを待ってられないタイプだからな。必ず病院まで送り届けるから、あいつの我が儘、許してやってくれ」

『……夫のこと、どうぞよろしくお願いします』

響子は再び謝罪をして、ためらった間ののちに、電話を切る。

江國はしばらく携帯電話を見つめ、それから電源を切って荷物の上に放り投げた。身体が重くなるほどの憂うつを抱えながら、ぼんやりと海の方を見やった。

江國も海が好きだった。高坂のように仕事こそ海に関わるものではなかったが、今でもよくひとりで海を見に行く。そのことを知っていて、金に余裕がある友人はサーフィンやヨットを勧めてくるが、江國は海を見ているだけで満足だった。

理由などわからない。

好きだから見に行くだけだ。

思い出せば、高坂と一緒に海を見に行った回数は数知れない。お金のなかった高校の時はヒッチハイクで海辺を渡り歩いたし、時間に余裕を作れる大学時代は海外にまで足を運んだ。当時、まだ友人だった響子は、そんなふたりを「海が恋人の変人たち」とよくからかった。

江國はゆっくりと立ち上がり、冷蔵庫に近寄った。中からビールを取りだし、一気に煽る。擦るような足取りでベッドに戻り、どすんと腰を下ろした。

——鯨になりたかったんだ、私は。

冬の、静けさだ。

身の凍えるような空気は澄み切って美しく、耳が痛いほどの静寂を作り出す。

そんな中、あざやかに蘇る言葉は、胸にわずかな痛みをもたらした。

「……鯨か」

残りのビールをちびちびと口に運びながら窓の外を見る。

幼い頃、まだ高坂という男の存在を知らなかった頃——こんな冬の寒さの中で、ぼんやりと雪が降り続ける光景を見つめていた。祖父が亡くなった晩だった。静けさの、例えるならば青い悲しみの中で、江國は祖父から貰った本を抱いていた。

残念ながら、憶えているのはそれだけだ。何という題名の本だったか。今じゃ古い記憶に埋まって探し出すこともできない——

いきなりくしゃみに身が震えて、江國は飛び上がった。いつの間にかうたた寝していたらしい。手に持っていたビール缶が枕元に置かれている。

身体に毛布が掛けられていた。どうしたことだ、とあたたかなそれを目をやって、江國は気付く。部屋の中が静まりかえっていた。巡らせた視界の中に友人の姿がない。隣のベッドは嫌味なほどに整理されていた。

「あんの、馬鹿！」

江國は上着を引っ掴んで部屋を飛び出した。恐らく、海を見に行ったのだ。疲れているクセに、……いや病気だったのに何やってんだよ、と悪態をつきながらエレベーターを使いロビーに降りる。

すでに照明が落とされ、人の姿がない空間を横切ろうとして、足が止まった。海に程近いソファへ腰を下ろす人影がある。臆気ながら影が踊っているのは、手元にライトか何かがあるためだろう。

「高坂」

名を呼べば、弾かれたように影が振り返る。逆光で顔は見えないが、間違いなく幼馴染みだった。

江國はほっと安堵の溜息を漏らし、椅子の間を擦り抜けながら近寄った。

「お前、ちったあ俺の心臓の心配もしてくれよ。このくそ寒い中、海でも見に行ったのかと思ったぞ」

「悪かったな。気持ちよさそうに寝ていたから、起こすのも気が引けて」

「……アルコールは久しぶりだったんだ」

小声で言い訳をしながら隣の椅子に腰を下ろす。

ひとり、ロビーの椅子に腰掛けている高坂の前には書類らしい紙やメモ帳が散乱していた。中には束ねられた原稿用紙もあり、作家の机を彷彿とさせる。江國の視線に気付いたのか、高坂は数枚の紙を手渡してきた。

「今まで手がけてきたデザインの資料だ。環境建築デザインの、参考書、入門書、そんなものを出そうかと思っている。前々から誘われていたんだが、忙しくて資料の整理もできなかったんだ」

渡された紙には序文のひな形らしい文章が書かれていた。まとめかねているらしく、訂正が多い。下には全体の構成もメモされている。江國は視線を上げ、薄い明かりの中で少し疲れの滲む顔を見た。

「総論か？」

「そんなところかな。だが、難しくてね。環境と一口にいても、実際は様々な学問が関わってくる。それらを、環境デザインのために修得しろというのも酷な話だし、私の気象学もほとんどが独学だ。それに俯瞰的で長期的な考えは身に付いていくものであって、学べるものじゃない」

人と自然の時は同じではない。人が自然の歩みへ合わせるためには、自然に対する敬愛が必要だからな、と嘆く口振りで高坂はいう。

自然は人の手など必要としていない、いうならば流れだから、出来る限りの干渉は避けなければならない。

その上で建築をすとなれば人の手を意識せざるを得ないだろう。

独り言のような呟きに江國は聞くとともに無しに耳を傾けながら、軽く唸った。

「そうだなあ。全体の構成くらいなら、少くくは手伝ってやれるかもしれんが……」

「いや、お前にはすべてをやって貰いたい」

「……は？」

「私は本文を仕上げるだけで手一杯だろうから、残りはすべてお前に任せる」

これを言いたかったんだ、と満面に笑みを浮かべる幼馴染みを見つめて江國は開いた口が塞がらない。あの時、高坂はお前にしか頼めないことだ、と言った。それは高坂のわがまを許容できかつ協力できる、という意味ではなかったのか。

急に笑みを引っ込め、真剣な顔で高坂は続けた。

「お前が私の知り合いだからという意味で頼むんじゃないからな。お前の仕事ぶりを見て、頼みたいと思ったんだ。前に、『縁(えにし)』という小説を自分がやったからと、プレゼントしてくれただろう。あの本のデザインが本当に好きなんだ。技に溺れるわけでもなく、内容を軽んじるわけでもない、あのバランスは素晴らしい」

江國は本のカバーなども手がけるデザイナーだった。カタカナの肩書きは似合わない、と高坂にからかわれてはいるが、小さいながら共同経営の事務所も持っている。

話を徐々に呑み込みつつある江國の方へ、高坂が向き直る。

「正式な契約を交わせば問題はないだろう？」

「あ、ああ」

オファーであるならば江國も引き受けやすい。仕事として時間を割くことも出来るし、ある程度割り切ることも出来るだろう。気圧されて、あごを引きながらうなづいたところで、江國は我に返った。

今にも鼻歌を歌い出しそうな友人を睨みやる。

「おい、高坂、疲れてるんだろ？ 部屋に戻って寝ろよ」

「頭が冴えて眠れないんだよ」

病身相手に、酒でも飲むか、と誘いの言葉はかけられない。江國は次の言葉に詰まったが、すぐに嘆息すると、机上に散らばった紙類をすべて紙袋に押し込み始めた。

高坂は黙って江國の動作を見ている。

あらかた片づいたところで、高坂が口を開いた。

「明日の朝は早く起きるからな」

わかった、と返事をして江國は紙袋を片手に歩き出す。

高坂は重い身体をゆっくりと動かして立ち上がり、ライトを消して、冬の薄明かりで煌めく海を思いやる。今の風は身を切るように冷たいだろう。その寒さに身を曝すことは叶わないが、その冷たさすらも、愛おしい。

高坂は軽く吐息を漏らした。

すべてを愛することは出来ない。

やがて、促す声に江國のあとを追う。

後ろ髪を引かれてふり返れば、海は黙然と、そこに在った。

身体を揺さぶる手を振り払う。

それを三度ばかり繰り返したところで、江國はやっと目を覚まして、意味のない言葉を漏らしながら上体を起こした。

煌々と明かりがついた室内で高坂が呆れた顔をしている。

「相変わらず寝起きが悪いな、お前は」

「……なんだったんだ」

早く起きるといったじゃないか、と当然のごとく口にする高坂を、今度は江國が呆れかえって見やった。

引き寄せた腕時計を確かめる。

「あのなあ、早くたって今は四時半だぞ？ 寝たの、一時過ぎだったのに」

「早く顔を洗って着替えろ。防寒対策は万全にしろよ？ かなり寒いだろうからな」

江國が起きたことを確認し、高坂はさっさと部屋から消えてしまう。

扉外の人となった高坂を遅ればせながら睨み付けて、江國は渋々ベッドを降りると、言われた通りに準備を始めた。

十分後、上着をわきに抱えてロビーに降りると、高坂はホテルの支配人と話し込んでいた。

何となく彼を見ていて、その身体が明らかに痩せていることに気付き、江國は息を飲んだ。

これまで、余命十ヶ月との告知はあくまでも言葉だけで、実感を伴っていなかった。

目に見える形で突きつけられ、逃れようのない事実だと、思い知る。

支配人と別れた高坂は、江國を促して歩き出しながら、友人の顔を見てわずかに眉間を狭めた

。

「……お前、まだ眠いのか？」

「いや、別に、まあ……昨日の夜、お前の資料見てて寝るのが遅くなったのは確かだけどよ」

「焦らなくてもいい。まだ時間はあるさ」

ふたりは肩を並べてロビーを横切る。外に出ると、昨日とはまったく違う空気が襲いかかってきた。まさに襲いかかるという表現が相応しいほど身体に厳しい。一瞬で頬が凍り付き、身体の隅々まで暴き出される。

高坂は衿を引き寄せて身震いし、長々と白い呼気を吐いた。

「寒いな」

「……身体、平気か？」

心配してしすぎることはないだろう。江國が上着を羽織りながら訊ねれば、高坂は明らかに苦笑した。

「私だって、自己管理くらいできるさ。子供じゃないんだからそんなに聞くなよ」

「何いってんだ。お前は手に負えないわがままなガキだろーが」

江國は言って、うんそうだと大きく自分に向かってうなづく。

高坂は思わぬ反撃に目を瞬いてから、ひどいなあとつぶやき、小さく笑った。

先を歩く高坂は道を選ぶように、ゆったりとした足取りでホテルから遠ざかった。彼の手掛けたホテルの景観は拘っただけあり、木々を含めた全体の中で、個を主張しない。それでいて、個が際だつ配置はまさに見事だった。

江國が想わず見惚れていると、

「いつ、……だったかな」

ぼつりと、高坂が言う。

江國は歩調を早めて、幼なじみの隣に並んだ。

「あれは、……小学校の時だったかな。学校の近くに海岸があっただろう？ あそこでお前とふたりでいたと思うんだ。いや、あれはお前じゃなくて、一緒に習字を習っていた誰かだったかな……？」

手探りの言葉は、時に途切れながら、続いている。

高坂は視線を心持ち上げ、どこことなく苦しげに眉間を狭めていた。

声もぎこちない。

「何をしていたのかは覚えていないんだけど、たぶん、海辺で遊んでいたんだろう。何かの拍子に、その子の持っていた荷物が波の中に落ちたんだ。途端に海が真っ黒になった。白い波頭が黒と入り交じって、砂も黒くなって……、私はそれを見ていて動けなかった。海が汚れる様がひどく痛かったんだ。なにか、こう、大事なものを汚されたような気がして……」

それは墨汁だったんだがと付け加え、高坂は唇を真一文字に結ぶ。苦痛を丸飲みした険しい顔だった。

江國はさり気なくその表情から視線を逸らす。

ふたりが歩いているのは、港からホテルへの舗装された道でもなく、昨日行った海岸への道でもなかった。高坂は迷うことなく砂利の細い道を往く。周囲は低い木に囲まれ、朝の風がそれらをさわさわと揺らしていた。

独白のように話は続いた。

「でも、時間とともに色は消えていくんだよ。砂も波も、汚れをすべて呑み込んでいくんだ。その時に、——ああ、こうやって海や地球は人を受け入れてきたんだなと、気付いたんだ。人のすべてを」

語る顔つきから厳しさが抜けて、やわらかい微笑に変化する。

いつも海や自然を思う時に見せる顔だった。

「その時に私は、雅量に満ち、とても綺麗なこの世界を守りたいと、漠然とだが強烈に思った。その為には何だってすると決意したから、今の私がある。思い起こせばあれが私の原点なんだな」

「……お前のその気持ちが、誰かに伝わればいいな」

海の寛大さを思い描きながら、江國は呟く。

高坂がうなずいた。

「そうだな。伝わらなくて当然だとも思うけれど、出来ることなら、知って欲しい。海や地球は人のように痛いなど言わない。ただ受け入れるだけだ。その寛容さは、人の中にもあるものなんだ」

そう言って、高坂が不意に大きく、身震いする。

彼の世界に引き込まれていた江國はそれで我に返り、思わずきつく、奥歯を噛みしめた。高坂は自分が死ぬ準備を着々と整えている。彼が存在しない世界に生きるだろう江國に原点を述べて、願いを語る。高坂(たかさか)悠司(ゆうじ)という人間がいたのだという証に、そして、完全ではない夢の続きを託す為に。

そんなに急ぐなよ——そう江國が口にしようとした時、急に前方が開け、薄明かりの中に海が浮かび上がった。

朝日を迎える前の海はどこことなく夜の余韻を残し、猛々しい。

「あともう少しだ」

足取りを速め、高坂が先に行く。

江國は言えぬ言葉を抱いたまま、あとに続いた。

ふたりが足を止めたのは例によって海岸だった。昨日と違う場所なのは一目でわかる。浜の広さと海の色が違う。辿り着いたその場所は直線で二十メートルほどしか砂浜が無く、三方を斜面に囲まれていた。

砂利道から見ただけでは、ここに浜辺があることすら、わからないだろう。

「また……なんか、秘境っぽいところだな」

「この島の聖地なんだ。余所者に教えることは基本的に禁止らしい。だからこそこの場所が守られてきたんだろうな」

聖地、という割にはあがめ奉られている雰囲気はないが、ゴミはひとつもなく、浜辺が狭いためか海が身に迫ってくるように感じられた。波に削られたかのように落ち込んでいたため、風も遮られて届かない。

腕時計を覗き込み、高坂はうなづく。

「間に合ったな。ん……少し早いか」

海は一層青さを増していた。

朝靄が遠く海上を覆い、夜明けの空と水平線の境界を曖昧にしている。冬の寒々とした空気が水の輝きを際立たせていた。

江國は砂浜に腰を下ろし、膝に手を乗せた。その少し海よりの場所に高坂は立っている。ゆるく腕を組みながら飽きることなく、目の前の海を見据えていた。

「本当は響子も連れて来たかったんだ。だがあれは私が何をすることも身体に悪いからと許してくれなくて、結局、止めてしまった。……お前は最初から誘うつもりでいたんだ」

「誘う、だったんだな。絶対に来い、ではなくて」

からかうように言えば、振り返って高坂は変な顔をする。

「そんなに強引だったか？」

「まあ、そうだな、完成間近の原稿を無くした時に、叔母が危篤なんで待ってください、と嘘を付くくらいに強引だった。慣れてるけどな、お前のそういうところ。それに、近頃は忙しくて麻衣子(まいこ)にも休暇を取れたの休めだの言われていたから、ちょうどよかったよ」

「麻衣子さん、元気か」

「あいつが元気じゃなかったためしはないね。つい先日も、掃除の邪魔だと蹴飛ばされたばかりさ」

「お前が手伝わないからだろう」

話は江國の妻からその子供に及び、ふたりは父親に戻ってたわいもない会話を交わす。江國が幼い娘の失敗談を冗談を交えて披露すると、高坂は息子のことを持ち出し、空だろうが本だろうが、青を見ると海だって喜ぶんだ、と笑った。

不意に高坂が黙り込んだ。

始まった、と掠れた声がつぶやく。

希望に輝いた顔に気付き、江國はその視線を追い掛けた。

そこに、——空はなかった。

江國は絶句する。

蒼茫たる世界が広がっていた。

水平線が朝靄に混じって掻き消え、空と海の境界線が失われていた。

靄の色が青く変わっている。

朝日の姿は見渡す限りどこにもなく、陽光は霞の中でのたうち回るように光量を減らしていた

。空である部分は、夜明けと相まって雲の影が独特の色合いを醸しだし、海のゆるやかな波を真似ている。風が雲を押し流しているのか波のようにざわめていた。

青霞みはうちに隠した太陽の光を受け、風に揺らめきゆらりと波立っている。

水平線を失い茫洋とした空は、水色、青、紺、藍と徐々に青味を深めながら、夜の余韻を残す光のない空へと繋がっていた。

地に張り付いた海は朝日の先駆を受けて水平線の間際が薄い水色に変わり、波打ち際にうち寄せるほど闇が混じって青味が増す。

大海原のうねりは朝霞にうっすらとうち消されて穏やかだ。

海と空に混じった朝日が遠慮がちに海全体を覆い尽し、青い世界を、艶やかに照らし出す。

その青き世界に真白い雪が混じる。

霞の中から現れ、海へと散っていく。

「————」

江國は両の手の平を握りしめた。

壮絶なまでの深青は、生身の人を徹底的に拒絶する、神秘的に満ちた深海を思わせた。

美しく、けれども深青色の世界は人を圧倒的な存在感で押し潰す。

波の音が異様に遠かった。

深海に独り放り出されたような強烈な孤独感と、海そのものを独占したような、安堵を含んだ満足感。

頬に風が当たらなければ海の底に迷い込んだと錯覚しただろう。

それほどまでに海と空は一体化し、太陽は遠く海の彼方にあるように感じられた。

「……え？」

呼吸を忘れた江國の前で唐突にすべてが一変した。

一条の陽光が空の冷やかな青を目を射る輝きに変え、なぎ払った。海に生命を育む優しさが茫洋と現れる。

太陽が顔を出し、水平線がくっきりと浮かび上がった。

神々しい光が満ち満ちる。

いつも通りの光景が安心感を呼び、身を固くするほどの緊張感を追放した。江國はほっと溜息を漏らす。体中を強張らせていたのか、気怠い疲労すらあった。

「……高坂！？」

視界の片隅で高坂が座り込んだ。倒れたような勢いに江國は我に返る。慌てて近寄れば、高坂は照れの入り交じった顔を伏せて口籠もる。ややあって、悪い、腰が抜けたらしいと恥ずかしそうに漏らした。

江國は苦笑しながら手を差しだした。

「……立ち上がれそうか？」

「いや、しばらくこのままでいい。ありがとう」

好意を断って、高坂は肩を落とすほどの溜息をついた。顔を上げたかと思えば、横に佇む江國へ照れを隠した笑顔を向ける。

「実を言うと、これ、初めて見たんだ」

「ああ、そうらしいな」

江國は答えながら今更のように感動を噛み締めた。いや、感動とっていいのかわからない。足が震えている。もしも座っていなければ高坂のように腰を抜かしていたかも知れない。

あまりに、壮絶な荘厳さだった。

人の存在などまったく無視した自然の無慈悲さに悔しさすら覚える。だが自然を拒絶しているのは見ている自分の方なのだ。

自然の中であって、人であることを意識することにどれだけ意味があるのか——江國は考える。

人でなければ光景の雄大さにただただ見惚れただろうか、と。

どれくらい朝日を見ていたのかわからないが、気付けば太陽は全身を海の上にさらしている。一瞬だけちらりと舞った雪の姿もなかった。

風で流されてきたのだろうか。この辺りで雪は珍しい、と心中で呟いた江國は、視界に蠢くもので我に返った。

高坂が立とうとしている。江國が再び手を差し出せば、高坂はひどく困惑した眼差しを作って、躊躇いながら手を取った。まだその肩は細かく震えていた。

海は陽光に染まり、青から橙色へ変わっていた。

煌めきは眩しいほどだが、穏やかな波が耳に優しい。

先ほどの現象など嘘のように寄り添ってくる海がそこにあった。

寄せては返す波へ混ぜるように、なあ江國、と高坂が口を開いた。江國はまだ視線を海に向けていた。気を取られたまま、なんだと適当に返事をすれば、高坂は少し身じろいで目を伏せる。

波が足もとまで打ち寄せ砂を洗った。

「私は、死にたくないんだ」

独白じみて呟かれた言葉に、江國は当惑して幼馴染みに目をやった。

高坂の眼差しはどこまでも遠かった。海でもなく、太陽でもなく、遙かに遠いところへ思いを馳せながら考え込んでいる目だ。

「……死にたくないんだ」

切望でも、願いでもなく。

ただ綴られた言葉は、江國の胸に重く沈んだ。

柔らかく冷たい手がそっと触れてきて、月を鑑賞していた高坂は驚いて手元を見やった。

響子が隣に座っていた。

夫が座っている居間のソファへ手をつき、高坂の手を物珍しそうに弄んでいる。伏せた瞳が三日月の儂い光に濡れている。

見慣れた我が家で、その光景はひどく扇情的だった。

冷たい手を握り返せば、響子は高坂を見上げ、軽く小首を傾げた。

赤い唇は何も語らず閉じたままだ。

「……どうしたんだ？」

「やっぱり、痩せたなあと思って。洋行(ひろゆき)さんが気にしてた……無理矢理にでも口に押し込んで食べさせちまえて」

「自分が大食いなのを忘れてるんだろう」

「そうかしら？ 悠司(ゆうじ)さんが小食のせいだと思うけれど」

拘束を逃れた冷たい指が、手の平や甲をすべる。

踊るように動き回る。

「そうか？ あいつはホテルの朝食でメシを二杯も食べてたぞ。高校の時はどんぶりに山盛りで食べていたからな、胃のキャパが大きいんだろう。人のおかずを横取りするなんて事はしょっちゅうあった」

軽く相槌を打ちながら、響子は戯れのような指遊びを続ける。

高坂はそんな妻の姿を眺めやった。

無断に出かけた旅行から帰ってくれば、不自然だった響子の対応は以前に戻っていて、次はわたしも連れて行ってねと口にただけで深い追求はしなかった。かわりに、家へ帰りましょうと言った。自宅療養は前々から勧められていた。トントン拍子に話はまとまり、高坂は数ヶ月ぶりに、自宅へ帰ってきた。

指が不意に動きを止めた。細い指が手に絡んでくる。痛いほど握りしめられ、高坂は妻を宥めるために冷たい手へ自分のそれを重ねた。響子は顔を伏せているため表情が見えない。

「どうした……？」

「……洋行さんから聞いたわ」

「何を？」

「死にたくないって、言ったって」

「ああ、そうか、聞いたのか——」

驚くことではなかった。江國なら、きっとそうするだろうと思っていた。優しすぎるあの男は自分が不器用だと言うことを十分知っている。そして、己の身の程も弁えている。響子に委ねるべきだと判断したのだろう。

「驚いたか？」

響子はいえ、と少し弾んだ声で否定する。

「すごい、……嬉しかった。あなたは、死ぬことが当然だという風に、まるで今までの生活を捨てることさえ厭わないようで……わたしは、それがひどく寂しかったの。わたしも、あの子ども、あなたにとって必要がないと言われたみたいで。——わかっている、そんなつもりはなかったんだってことは。でも、あなたの生き方は、周囲にいるものを不安にさせるわ」

反論しかけた夫を押さえて響子はゆっくりと綴る。今まで言えなかった言葉を、月の下、丁寧に語る。

「生きるために執着するものが海以外にないみたいで。話しかければ返事はある。でも、話しかけなかったら？ あなたから話しかけてくることなど無いんじゃないかって、いつも、不安だった。特に入院してからのあなたは、生に対する執着を見せなかった。このまま死んでも悔いがないって顔で笑われて、わたしはどうすれば良かったの？ あなたの墓に死ねておめでとうと声を掛ければ良かったの？ そんなこと、出来るわけないわ。せめて、辛いことかも知れないけど、生きたいと——死にたくないと思ってくれないかって、わたしはずっと願っていたのよ」

でも、あなたは変わらなかったから。わたしは疲れたから。顔も見れなくなったから。

ぽつりぽつりと言葉は流れ、高坂の手に、妻の指が食い込む。

思いの丈を吐き出すような強い力だった。

「あなたも苦しいって、わかっていたけど——わたしも不安だったのよ」

「私は……」

何かを言いかけて、高坂は絶句する。

言葉が浮かばなかった。

ただ、妻の手を握り返す。

あの——海辺で見た蒼茫の世界は、高坂のちっぽけな意地を吹き飛ばした。悔いのない人生だった、死を受け入れるという偽りの言葉を無きものにし、裏に潜んでいた生への執着を露わにした。目を閉じれば、また身が震え出しそうなほどの精緻さを持って、あの青さが身に迫ってくる。

高坂は奥歯を噛んだ。

ゆるく嘆息する。

「そう……だな。死ぬ覚悟は出来ていると吐く向こうで、私は死にたくないと声高に叫んでいたんだ。自分の言葉で自分を騙そうとしていた。本当に大切なものから目を逸らしていたのは私なんだな……。思いのままに生きてこられたから、それを言い訳に、私は逃げていたんだ。その逃げが、お前を、苦しめた」

高坂は思わず妻のほっそりとした身体を掻き抱いた。

人のぬくもりが肌をあたためる。

「お前も、あの子も、私は愛しているんだよ。今の仕事も、江國も、事務所のみんなも、私の知っている海も、知らない海も、果てはこの地球さえも……すべて愛おしいんだ。だけど、すべてを愛することはできない。この愛おしさをただ持て余すことしかできないから、私は、ひどく、寂しくて」

「……みんな、知ってるわ」

腕の中で優しく響子がいう。

その柔らかい物言いがますます胸に迫る。さらに腕へ力を込め、高坂は溢れそうな想いを必死になって押し留めた。

「寂しくて——辛くて、でも、幸せなんだ。私は幸せなんだ。嘘じゃない。私は確かに幸せなんだよ。私のことを案じている人に悪いくらい、幸せなんだ……」

「うん」

「死ぬことは怖い。怖いけど、今、幸せなのは事実なんだ」

背中に回された響子の手がシャツを握りしめる。

その力強さに、高坂はなぜか安堵する。

「それを……忘れないでくれ。私がどんなに弱音を吐いても、苦しいと言っても、お前を愛していることは変わらない。すべてが愛おしい気持ちはいつまでも真実で、それが幸せであることも

、いつまでも変わらないんだ」

響子は腕の中でゆっくりとうなずく。

わかってるわ、と濡れた声が呟いた。

「私を許してくれ。お前だけを愛せない私を許してくれ……」

「わかってる。わかっていて、一緒になったの。あなたが悪いんじゃない。わたしはあなたのその姿勢が好きなの。すべてを愛しているあなたが好きだから。許しなんか請わないで。そんなことを言われたら、わたしが惨めになる。だから」

「……お父さん？ お母さん？」

幼い息子の声に、高坂はびっくりして振り返った。

いつの間に二階から降りてきていたのか、一海(かずみ)がそこに立っていた。響子は素早く離れると子供に近寄り、身をかがめる。

どうかしたの？ と訊ねる声は完璧に母親のそれだった。

「喉が渴いたの？ 今、水を持ってきてあげるね」

言って、響子は隣のキッチンへ姿を消す。高坂は気恥ずかしさや何とも言えない気持ちを苦笑にして口元に乗せながら、所在なさげに立っている一海を手招きした。幼いなりに父親のことは察しているのか、おずおずと近寄ってくる。

体温の高い一海の身体をソファの上に抱き上げた。

「寝れないのか？」

「うん……こわい夢、見たから」

輝く目を細めながら一海は言う。

「すごくこわくて。とび起きちゃったの」

それで親の寝室に行ったら誰もおらず、喉の渴きも相まって降りてきたのだろう。高坂は微苦笑を作りながら丁寧に柔らかい子供の髪を撫でる。一海は少し躊躇ってから父親の手に抱きついた。小さい身体を膝の上に抱き上げる。

「一海、ごめんな」

黒目がちの瞳を瞬かせ、一海は不思議そうに父親を見つめた。

「なんでお父さんがごめんなさいをするの？ お父さん、何か悪いことをしたの？」

「ん……、そうだな、これからしようと思っているんだよ」

「何をするの？」

高坂はいたずらっぽく笑った。

「少し、遠いところへ行くつもりなんだ。……お母さんにはあとで話すから、まだ言っちゃ駄目だぞ。驚かすつもりなんだ」

「ドイツでしょ」

背後から割って入った声に驚いて振り返る。響子は居間の入り口から夫を上目遣いに睨み付けた。この人はいつまで経っても懲りると言うことを知らないんだから、とその目が物語っている。

「洋行さん、飛行機の手ケットを取ってくれて頼まれたけどいいのかな？ って頭を悩ましてたからね。いい加減に甘えるの止めないと、洋行さんが可哀想」

「甘えてなどないさ」

何を言う、と不可解そうな顔をする夫に、響子はやれやれと肩を竦める。息子の手を取って高坂の膝から降ろし、膝を付いて、一海の小さな手にあまるコップを持たせた。

響子は横目で夫を見ると、つっけんどんに言った。

「行くのはかまわないけど、連れてってね。待つのはもう嫌だから。あなたのやることをひとつひとつ見ていたいから」

一海がありがとう、とコップを母親に返す。響子は一海を連れて部屋を出ながらふと、振り返る。何気ない——料理をしている時と変わらない顔で口にした。

「あなたが見たいものを、わたしにも教えてね」

高坂が何かを言う前にふたりは姿を消した。呆気にとられたあと、浮かび上がる笑いを顔に出して、高坂はソファに身体を埋める。

余命の宣告を受けた時、高坂はドイツへ行こうと決めていた。

本当は、日本独自の、環境を保護した社会未来像を自分で作るつもりだったが、十ヶ月ではあまりに時間が少なすぎた。

ドイツのそれが自分のイメージに近いかわからないが、日本よりも進んでいることは確かだ。

何もないよりも、取っ掛かりでもあれば、生きている間に出会えなかった誰かが形にしやすくだらうと……。

高坂はゆっくりと目を閉じた。

今までに誰も見たことがない、そして誰も知らない、自分だけの世界を思い描く。

密やかに微笑ながら、彼は眠りに身を委ねた。

かの月の守りゆくもの
国の如何を問わず
そは古き日に すべて結びし
海との盟約のおきて
——ビート師

江國は静かに海を見つめていた。

実家のすぐ近くの、幼い頃から何度も遊びに来ていた懐かしい海だった。初夏の穏やかな風は波の飛沫を江國のもとまで運んでくる。いつ来ても変わらない、ということはないがほとんど一緒に想えた。郷愁に満ちた光景だった。

好きなはずの海を見つめているのに頭は虚ろだった。

何も考えず、ただぼんやりと江國は海と対面している。

——一週間前、高坂が逝った。

最愛の妻と息子、そして江國など親しい友人に看取られ、眠るように旅立った。

延命措置を拒んだにも関わらず、宣告を半年も越えて生きた。

命をかけたといっても過言ではない本の完成を待つことはなかったが、校正もほぼ終わっており、今頃は献本が彼の霊前に置かれていることだろう。

遺言はなかった。

形見分けは響子に話してあったらしく、江國には海の写真集など本が十七冊と、響子の好意で、落書き帳めいたノートなどが贈られた。個人的なメッセージはなく、それがなんだか高坂らしくて、江國は一抹の寂しさと奇妙な安堵感を覚えた。

ノートには様々なことが綴られていた。日々の取り留めのない考えから始まり、映画の感想、夕食の献立、起床時間、購入した物品、よくわからない単語などが無数に並んでいた。研究に関する記述に至っては殴り書きなので判読もできない。入院してからのものであることだけはわかったが。

けれども、最後の頁には、明らかに人を意識した文章があった。

恐らく——江國と見た、例の光景を思い描きながら書いたのだろう。

触れなば壊れし濃密な蒼然

われ光の届かぬ深海にて見澄ます

海 各(ひと)つ 空 各(ひと)つ 命 各(ひと)つ

江國は海を見つめる。

隣に高坂が座っているような気がした。見ればきっと消えてしまうが、明らかに気配がするのだ。静かで、そのくせ自己主張をして止まぬ男が、同じように海を慈しんでいる。

風が呟きを浚う。

「海はいいな、高坂」

当たり前だろう——。

幻の返事には、柔らかい微笑が含まれていた。

終わり

参考文献 われらをめぐる海 レイチェル・カーソン 日下実男訳 早川書房